

analog

2007
AUTUMN
vol. 17

記事ページをオールカラー化!

大好評! 連続企画

世界の
スピーカー
ブランド②



特集

レコードを
よりよい音で聴こう!
フォノイコライザー
試聴レポート ②

好評連載

銘機を鳴らす
第3回「DIATONE」

いまこそクラシックカメラを楽しもう
第11回「ドイツの中小メーカー①」

- タイプ別 管球アンプ研究
コンパクトプリメイン編
- アナログ名門ブランド研究
- モルトウイスキーの蒸留所を訪ねる
- 現役の骨董品 20世紀ラジオ
- アナログが楽しめる店
- アナログ機器データファイル

ここだわり街道

高和元彦 Manabito Takawa

影の技術軍団SCCIに脚光を当てる

いま、私の前には、一人の筋金入りのプロフエッショナルが座っている。ところが、この男は減多に表舞台には姿を現さない。サウンド・クリエーターズ・インク(SCCI)を創業した齊藤文昭社長(59歳)である。

この会社は1971年秋に発足したのだから、昨年35周年を超えて、その業績はますます伸びている。どんな会社かという点、スタジオ以外の音響関係の制作をバックアップするプロの技術集団なのだ。

今回は、多忙な齊藤社長をここ編集部に呼び出して、いろいろとインタビューをしながら、その仕事ぶりを紹介する機会を特に設けたかったのである。

レコーディングの場所が、スタジオの外に出て、ホールなどを使うことは少なくない。その理由は、編成が大きくてスタジオには入り切らない場合とか、残響を抑えたデッドなスタジオでは得られない楽器の響きや音場が欲しい時に、本公開のホールをスタジオ代わりに使用するた

めである。もちろん、ライブ録音も含まれる。こうしたスタジオ以外の録音のことを、我々は「外録(ガイロク)」と呼んでいる。

始めの頃は、そのための機材といえども、常設のスタジオとほぼ同じ水準のものを、レコード会社が全て保持していなければならなかった。そして、外録のためにいざ出動となれば、これらの機材を運搬するという大きな仕事が続いている。運送会社に委託することもできるが、現場で録音のためにセッティングするのは他人には頼めない。録音部のミクサーとアシスタント達、せいぜい3〜4名がそれを担当するのだが、この程度の人数ではとても足りない。それでも、この僅かな人員で頑張るのが当たり前だった。

そこへ、SCCIという会社が生まれたのだから、当時どれだけ助かったか、お察し頂けると思う。といっても、その頃のSCCIのスタッフは数人程度だったし、貸し出す録音機器も少なかつたので、レコード会社のものを搬入出して

た。それでも、運搬や的確なセッティング、事後の撤収などで彼らは強力な「助っ人」となった。まず、この会社を設立した直接の動機は何だったのかを齊藤さんに訊いてみる。

齊藤「あの頃のレコード会社には、8トラックのテレコしかなかった。そこで新しい16トラックのマルチプルテープレコーダーを購入し、貸し出すことで商売できるんじゃないかと考えました。

だんだんレコード会社や放送局などに貸すところが増えてきて、この会社のことよく知られるようになった。

それ以前、私は2年間ほどアルバイトとしてキングのスタジオに出入りしていました。当時の録音部長だった菊田さん(本誌に連載中)から、ひとりで働くより、いま必要とされる一種の『すき間産業』としての協力会社を起したらどうかともいわれた。これも、ひとつの大きな動機になりました。もちろん、16トラックのテレコを看板にすることも彼のサジェッションでした。ただし、レコーダーの構造を知っているか、いないかということも勉強しないと、この商売は続けられませんでした」

弱冠24歳の彼が立ち上げたSCCIは、それ以来、好況の日本経済に乗って、仕事は増え続け、急速に発展していった。組織も拡大し、従業員の質も向上し、前述の外録用の機器類も充実して、今ではほとんど同社が装備している。

齊藤「現在は、正社員が30人以上にいますし、それにアルバイトは数人程度です。近頃は、年間の出勤数は1200〜1300回はある。1日に計算すれば3〜4本くらいこなすのだから、よくこんなにあるなあと思います。最初のうちは、レコード会社がほとんどを占めていま

したが、今では圧倒的に放送局の仕事が多い。例えば、NHKの『ど自慢』やFM、CSTレビの収録、花火大会やスポーツの生中継までやる。その中にはサウンド録音もある。

地域的には、山陰地方以外は日本全国をカバーしている。網走刑務所へ出掛けて演歌の歌手のライブ録りまでやりました(笑)」

いつの間にか、SCCIは強力なオーディオプロ集団に成長していたのだ。それにしても、大半を正社員で占めているのは驚かされた。これだけハードな仕事を効率よく高いレベルで維持できるのもその辺にあるのだろう。

機動力を増すためには、6台の中継車(写真)を持っている。主に野外のイベントの収録のために用意しているそうで、このうちの2台は、東京都内ならいつでも30分くらいで行けるとのこと。消防署も顔負けだ。

これらの中継車は、それぞれ高性能の業務用録音装置を搭載しているのだから、その経費だけでも5億円くらいになるといっても頷ける。

プロデューサーというのは、いざ録音セッションに入ると、音楽的にも技術的にも、その時の「全責任」を負う立場にある。例えば、演奏中のミスはないか、楽器のバランスはとれているか、機材は正しく動いているか、時間内に録音が終わるだろうか——などなど、全てに気配りをせねばならない。その中であって、SCCIのスタッフはミクサーの指示に従って機材の搬入・出から機材のチェック、ステージやモニター室のセッティングなどを受け持っている。そのおかげで、私は専ら「音録り」に神経を集中することができるのである。彼らの存在なくしては不可能なのだ。実は、私は今更ながらそ

のことに気がついたのである。彼らは「縁の下
の力持ち」というよりも、私達の脇をがっちり
固める頼もしい「護衛船団」なのだ。

今回、私がSCIを特別に採り上げた理由は、
この会社の存在を取り上げたからである。

これだけ組織が大きくなったSCIだが、仕
事そのものは常時いくつかの班に分かれて各地
の現場に派遣されている。そこで知りたいのは、
社員のレベルはどのようにして保たれるのか、
また、どのように育成していくのかという点で
ある。

齊藤「毎年200〜300人くらい面接して、
40人くらい実習に採ってみるけれど、その中で
音響の専門学校を出た人は案外少ないのです。
むしろ何も知らずに入ってくる人の方が長続き
する。ただ、女性の場合は専門学校出の人がよ
く残ってくれる。男性では、耐えられなかつた
り、飽きたりして辞める人も少なくない。

そして30歳代になると、一部の社員を他の会
社に外向させたり転職させてみる。SCIはし
よせん私の頭の中でやっているような会社だ、
よその会社へ行っているいろいろな技術を学んでも
らうためです。レコード会社だけでなく、放送
局やイマジカみたいな先進的な映像技術の知識
を得て育ち、何年か経つと手練れた人間になっ
て戻ってくる。そうした出先の会社と情報交換
などで関係が深まるメリットもある。

現在フリーのエンジニアのリストを見ると、
SCI出身者がかなりいる。(『analog』誌
を手にとって)同様に、ここに載っている会社
の中にならって社長になっているのが5〜6人は
いますね」

SCIは、こうして社員の質を向上させると

ともに、優れた人材を育成して世の中に送り出
すという面でも貢献している。

今度は少し意地の悪い質問を試してみた。それ
は、自分への反省も含めて、長い間多くの会社
に協力していると、エンジニアやプロデューサ
ーの企画の良否とか、実力の優劣が見えてくる
のではないか――。

齊藤「うーん、正直いって、あまり深く見てい
ないですね。相手は一応クライアントですから、
時に気になることがあっても、立場上何も言わ
ないことが多い。ただ、私達も人間ですから、
優秀なクライアントが自分達をその制作のクル
ー(仲間)として平等に扱ってくれる時は別です。

「豚もおだてりや木に登る」で、喜んでこれま
でのノウハウを発揮して懸命に働きますよ。そ
れに反して、あまりレベルの高くない場合や、
私たちを見下して単なる使用人扱いされれば、
こちらの対応も適当なものになる。また、そう
いうクライアントに限って、あとで料金を値切
ってくる人がいる。そういう人とは距離を置く
ようにしています」

次に、アナログ時代に始まり、デジタルへ移



株式会社SCI 代表取締役
齊藤文昭氏

行していったところで、どういう対処をしたの
か、両者の違いをどう捉えているのか。

齊藤「私自身は、1980年代に間孝次部長
の下でCBSソニー(当時)にスタジオマネージ
ャーとして兼務していたことがありますが、こ
の会社ではデジタル技術に先進的なことをやっ
ていた。そのおかげで、デジタルとはなんぞや、
ということ随分勉強させてもらった。

アナログの場合、一番の問題はレコーダーに
ある。ステューダー級の製品でもヒスやドロツ
プアウトはもとより、機械的にも不安定で、絶
えずメンテナンスに手間取ること悩まされ
た。それでかねてから、デジタルレコーダーに
ならざるを得ないのではないか、と思っていた。

それと、その頃は消極的なレコード会社に先
行して、レコーダーをデジタル化して、販売に
結びつけようとも考えた。ただ、音の面からは
デジタルには抵抗がある。仕事上の立場からハ
ツキリは言いにくいですが、個人的意見としては、
デジタルでは微妙なニュアンスが出にくい
と、低音の実在感が不明瞭なので、その処理に
は苦労している。

しかし、レコーダー以外の調整卓などでは、
まだまだアナログが主流である。それと、一旦
デジタル信号になると、いまやその行き着く末
は圧縮されて音楽配信で聴かれるのかと思うと
寂しい。

この前、あるスタジオでエンジニアが随分ラ
フな音作りをしているので思わずたずねたら、
彼いわく『いいんだよ、どうせCDになるだけ
だから』(笑)

最後に、SCIの存在理由と役割を確かめて
みよう。

齊藤「ひと言でいうと、裏方の道具となれ
です。裏方、つまりミクサーをサポートする道
具であって、それに徹すること。私達は出過ぎ
たらいけない。エンジニアやプロデューサー、
ディレクターが気持ちよく仕事ができる場を提
供することが仕事だと思っています」

謙虚な言葉である。SCIは創業35周年を経
て、今や日本最強の音響制作会社となった。ラ
イバルは一社もなく、この世界を独占している。
SCIに対して「あそこに頼めば何とかなる」
という評価があるそう。彼らがいかに信頼さ
れているかを言い表した証言である。

西に東に日夜行動する技術軍団を、しつかり
コントロールする齊藤社長の「辣腕」に脱帽す
る。今後の一層の発展を願ってやまない。

備考・写真の齊藤氏は一見逞しいが、実はかな
りのマザーコンプレックスで、ひどい高所恐怖
症なのだ。あだ名は「ググシユ」という人気者。
(後略)



SCIが所有する大型録音中継車の1台。コンソ
ールはNEVE VR 48-48とSSL C200、モニタースピー
カーはYAMAHA NS-10MとGENELEC 8040A
を搭載している